

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第91号

平成31年7月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

龍覚坊と藤原秀康は和田義盛の末裔であった

## 桓武平氏・鎌倉中央とつながる龍覚坊の出自

龍覚坊は楠氏との接触を求めて観心寺に入ったか

### ● 藤原秀康は田原に潜んでいた！ ●

**承久の変**／後鳥羽上皇軍の総大将、藤原秀康は讃良＝四條畷の武士／この頃、田原は七条女院（後鳥羽天皇母）領であった／藤原秀康・秀澄兄弟が最後に潜んでいた場所讃良は田原か／**下田原に残る小字、「隠里」発見！**

文治元年1185年、守護・地頭の設置によって武家政権が始まる。しかし、源氏三代（頼朝・頼家・実朝）の将軍が断絶すると、執権北条氏が実権を握る。そして後鳥羽上皇率いる朝廷と北条執権幕府との確執高まる。

承久3年1221年、後鳥羽上皇は執権北条義時追討の宣旨を発し、幕府打倒に動く。京都は1カ月で幕府側に占拠され、勝敗を決し、上皇は隠岐へ流された。ここに、公家政権は決定的に失墜する。

この承久の変で、上皇軍の総大将を務めたのが藤原秀康。秀康は、奮戦するも、破れ、本拠地の讃良に潜んでいたところを捕えられる。この讃良とは、「田原ではなかったかと云われる」と記す日本歴史地名大系。

秀康は田原に潜んでいたのか？

下田原に残る小字名に、下田原2448番地の「隠里」を発見！

小字・隠里の場所は、縄文の昔から田原の人々が住まっていたと云われる清滝街道沿い・田原遺跡付近から遠く北に離れ、小松寺・小松城があった場所の東側・片田浦に広がる棚田の西（現在の飯盛霊園敷地内の北東部）の山林の中に位置する。

### ● 義盛と和田氏の乱 ●

和田義盛（1147～1213）は鎌

倉時代前期の武将、三浦氏の一族で、頼朝挙兵に参加し、常に頼朝に近侍してその信頼を得た。

治承4年1180年、御家人統制機関・侍所が設置されると、別当職に補任される。頼朝没後、元老13名の合議制が始まると宿老の一人として入る。このように、幕政の混乱の中で、幕閣の最長老として隠然たる勢力を持つようになる。

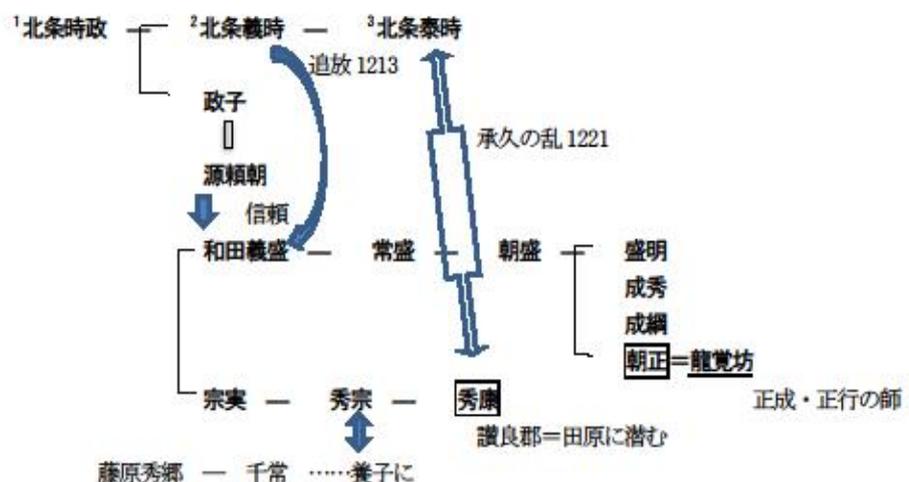
しかし、健保元年1213年5月2日、北条氏の巧みな挑発に乗せられて和田合戦が起き、破れる。

観心寺文書は、飛騨の国、岐阜県高山市在、大八賀村大字瀧村に入った和田義盛の末裔として、「龍覚坊僧侶者飛騨瀧之産。和田朝盛之四男、朝正者遍照寺之弟子也」と、龍覚坊の出自について記している。

### ■和田氏の乱

頼朝死後、北条氏の台頭とともに、幕府草創期に活躍した御家人が次々と滅亡していくが、その流れの中で起こった事件。和田合戦ともいう。

執権の地位を得た北条義時にとって最も有力な対抗者は和田義盛で、大きな障害となる。義時は様々な策を用い、



義盛を挑発、反逆を誘い、滅亡を謀る。

將軍実朝誅殺の陰謀発覚を機会に、和田氏の勢力を削がんと厳罰を実施した義時。この時、義時の策略にハマった義盛は、北条氏打倒を決意して、挙兵・幕府を急襲。しかし、義盛は劣勢を強いられ、乱戦の中で戦死、和田氏の主流はほとんど滅亡した。

前ページに掲載した「龍覚坊と藤原秀康の関係図」を以下、説明する。

- 源頼朝、義盛を武者所別当に任ずる
- 義盛は、鎌倉幕府で侍所別当を務め、幕閣として隠然たる勢力を誇った名将
- 2代北条執権義時、義盛を追放（健保元1213年）
- 和田氏一族、飛騨の国、高山瀧村へ隠遁
- 義盛4代目、4男が朝正、改め龍覚坊
- 義盛の弟宗実（むねざね）の子、秀宗、千常（のちつね）末裔の藤原氏と養子縁組 秀宗の子が秀康
- 秀康、承久の乱で泰時と戦い、破れる（承久3年1221）
- 龍覚坊と秀康は、難の遁れた和田義盛の末裔であった。
- 龍覚坊は、河内に入り、正成・正行の師・指南役となる。
- 秀康は、承久の変で宮軍の総大将となり、破れ、田原の地に潜伏し、捕まる。

## ● 藤原秀康は讃良の武将 ●

藤原秀康は四條畷市立歴史民俗資料館 HP「讃良郡絵物語」に登場する。

壇ノ浦の戦いの頃、後鳥羽天皇に仕えた讃良の武士で、後鳥羽上皇が承久の変を起こした時、中核武士となった藤原秀康と弟秀澄。親の代から讃良を治めた有力武士であったが、戦いに敗れ、敗走。兄弟の本拠地である讃良に潜んでいるところを捕えられる、とある。

### \*四條畷市史に載る藤原秀康

河内志によると、藤原秀康は、「藤原千常の後裔にして、父は秀宗、はじめ左衛門尉となり、のち諸国の守を歴任した。承久3年、後鳥羽上皇の詔を奉じて征東の将となるも、官軍利あらずして京は陥った。逃れて本国の讃良に潜伏して再起を企てる間に、搜索発見され命を失う。」とある。

### \*枚方市史に載る藤原秀康

秀康が歴任した諸国の国府とは、伊賀・河内・備前・備中を指す。河内の守の権勢を利用して、茨田郡伊加賀郷に所領をもち上皇方の武将となっていた。

（承久の変勃発）四か月後の十月六日、讃良郡潜伏中に捕縛の身となり、十四日に斬首された（吾妻鏡）。（幕府）探索の一級戦犯者である秀康を、畿内近辺たる当地域に隠し通すことは不可能であった。

## ● 龍覚坊と藤原秀康 ●

承久3年1221、承久の変では、藤原秀康が総大将を務める後鳥羽上皇軍2万と、北条泰時（3代執権）が総大将を務める幕府軍19万が戦った。日本歴史地名辞典には、上皇軍の総大将、藤原秀康とその弟、秀澄が戦いに敗れた後、潜んでいたと云われる讃良郡とは、田原荘でなかったか、と記している。

田原遺跡周辺には、縄文・弥生の古くから人々が住んでいたと思われ、田んぼや平地が広がり、美しい山並みが開

け、人々の営みの様子を伝える字名が残る。そして、下田原北部の山中に、藤原兄弟が潜んでいたのではないかとと思われる場所「隠里」の小字を発見した。

また、藤原秀康は北条義時（2代執権）に滅ぼされ、飛騨の山奥に落ちて行った和田義盛の弟、和田宗実の末裔であることが分かった。宗実の子、秀宗が藤原千常の末裔藤原秀郷流に養子に入り、その子が秀康である。

一方、正成・正行の師となった僧・龍覚坊は、この和田義盛直系の4代の末裔、和田四郎朝正であった。

田原ゆかりの藤原秀康と、楠氏ゆかりの龍覚坊が、共に同じ和田一門であったことの発見は、当地・四條畷と千早赤阪・東条という二つの地を繋ぐ。

## ● 龍覚坊の出自がもたらした楠氏の識見 ●

そして、この発見は何よりも、正成・正行の政治力や文化力に大きなヒントを与える。

すなわち、正成・正行の師、龍覚坊が、源頼朝から信頼され、頼朝が征夷大將軍宣下の折侍所別当職に任じられ、幕閣として隠然たる勢力を誇示した名将・桓武平氏・三浦氏分流に連なる名門・坂東武者であった和田義盛の末裔であったことは、楠父子に様々な情報・知識・智恵をもたらしたものである。

河内の国、しかも千早赤阪という田舎の一豪族に過ぎなかった楠氏にとって、龍覚坊がもたらした情報は全国、そして中央に繋がる政治・経済・文化に通じるものであっただろう。

師・龍覚坊の教えが、千早赤阪の一豪族にはとどまらず、中央ともつながる識見を持ち得たことを想像させる。それは、龍覚坊の出自にあった。

## ● 龍覚坊は、意図的に観心寺に入った ●

扇谷は、今まで、龍覚坊が観心寺に入ったことで、結果として、楠氏の菩提寺である中院（観心寺の塔頭）の僧になったとの理解であった。しかし、龍覚坊の出自が明らかになると、龍覚坊は偶然観心寺に入ったのではなく、龍覚坊は楠氏との接触を求めて意図的に観心寺に入り、楠氏との交誼を結び、様々な情報を伝え、知見・識見を授けたのではないかと考えられる。

和田氏の乱に敗れ、鎌倉を追放され落人として生き延びざるを得なかった和田義盛の末裔には、反北条意識は綿々と引き継がれていったものと思われる。その事は、藤原秀康が後鳥羽上皇軍の総大将を務め、北条執権政府に立ち向かったことでもわかる。

龍覚坊が自らの意思で観心寺に向かい、楠氏と交誼を結び、正成・正行の師となったとすれば、太平記に描かれた後醍醐天皇と正成の出会い同様に、歴史の奥深さを感じる。

正成、正行は、千早赤阪から中央に躍り出て、正統な天皇を支え、吉野朝復権ただ一筋に生きることとなるが、龍覚坊が意図的に観心寺に入ったとすれば、二人の運命は歴史的な背景によって導かれていったのである。

龍覚坊の出自がもたらした楠氏への影響は計り知れないものがあつたといえるのではないかと。

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）